関西久徴会発足50周年 カウントダウン特集 PART 1

関西久徴会 誕生から もうすぐ50年

時代とともに
移り変わってきた
総会・懇親会・・・
その様子を
振り返ってみました

『久徴会関西高校部会』として発足、第一回総会は1963(昭和38)年でした

関西久徴会は、1963(昭和38)年に『久徴会関西高校部会』として発足しました。第一回総会は同年5月26日、同窓会づくりに奔走された先輩の勤務先「大和紡績」のホールで開催され、出席者は63名。
その5年後の1968(昭和43)年、会の呼称が長くて使いにくいこと、高女も含めたものにすることを目的に、現在の『関西久徴会』と改められました。当時は毎年総会が開かれ、「島根ビル」などを会場に、高女の方々や高校4・6期を中心として20名前後が参加していました。

☆発足当時の写真などをお持ちの方、ぜひご一報ください！

1970年代から80年代にかけて、若い世代の参加とマンネリ打破に苦心

1971(昭和46)年からは、ムードー新と若い人の参加を考慮し、安価でたくさん飲食できる店、誰にでもわかりやすい場所として、ミナミのビアレストラン「ニューミュンヘン」に会場を固定。新卒者を格安な参加費で歓迎するなどして出席者を増やしていました。
しかし、その後一時活動が沈滞。1985(昭和60)年、総会を中断するという思い切った策によって、会員からの開催を求める声を喚起したそうです。

2000年代、参加者全員が楽しく盛り上がれる総会・懇親会へ

2001(平成13)年、銭太鼓同好会『彩の会』が登場。続く2003(平成15)年は、19期有志による和太鼓も披露。さらに2005(平成17)年からは、出席者全員が大きな輪になって歌い踊るフィナーレも名物イベントになりました。
この10年、ホテルやビアレストランなどに毎回100名以上が集合。会員による手づくりの良さが際立ち、まるで大人の学園祭のような熱気があふれ、参加者全員が楽しく盛り上がれる総会・懇親会へと進化し続けています。

1986(昭和61)年に再スタート、会場一新講演会も開催して大盛会

"再生関西久徴会"を目指して総会が再スタートしたのは、翌1986(昭和61)年のことです。女性陣から会場選びへの要望が出され、"身も心もウキウキしたい"という"オンナゴコロ"を汲み、初めてホテルでの開催を決定。
OBPに新築オープンしたばかりの「ホテルニューオータニ大阪」を会場に、新たに講演会も加えられ、かつてない大盛会となりました。そして以後は、準備の大変さを考慮し、2年に一度の開催へと変わりました。

1990年代、世代を超えたつながりを大切に大震災時も開催

1989(平成元)年、一時期は高校の同窓生だけで開催されていた総会に、高女の皆さんも参加。高女・高校一体となり、世代を超えたつながりが深まっていきました。会場もホテルを主体とし、講演会も定着。
1995(平成7)年1月、阪神・淡路大震災で中止・延期という意見もあったなか、"こういう時だからこそ、お互い顔を合わせて無事を確かめ合いたい"と開催を決断、7月の「ヒルトン大阪」での総会には158名が参加しました。

※この記事は関西久徴会会報バックナンバー、主に会報20号(1999(平成11)年)を基に作成しています。
「関西久徴会の歴史」について詳しくお知りになりたい方は、関西久徴会ホームページをご覧ください。
■関西久徴会について→「関西久徴会の歴史」→各エリアの同窓会組織の歴史→関西久徴会→「関西久徴会を育ててきたひとびと～思い出を語る～」

「会報 45 号」 (発行:2011 年 12 月 10 日)より抜粋

関西久徴会発足50周年 カウントダウン特集 PART 2

50

関西久徴会の会報は現在、年に2回(6月・12月)、約3000部発行されています。
発送にあたっては、会員有志が集まって、宛名ラベル貼りや会報封入などの作業を行い、
当会会員(約2200名)をはじめ、母校や地元・全国各地の関係組織宛に配布しています。
ではこの会報、いつごろ創刊されたのでしょうか。どんなふうに変わっていったのでしょうか。
バックナンバーを掲載するとともに、編集担当者のエピソードで振り返ってみます。

お手元の会報は、創刊から約25年！ あなたに届き始めたのは、どのころ？

1988年(昭和63)年創刊
タブロイド版10ページを総会時に配布

1989(平成元)年に2号発行
巻頭は、今岡昌滋会長(当時)の就任ご挨拶
当時の編集担当中野雅行さんの「とにかく多くの会員の皆様に登場していただき紙面で交流の輪を拡げることを作成ポリシーとしました」というコメントも掲載

中面には会報発行の契機となった1986(昭和61)年の総会報告も

創刊号表紙は、杉谷保憲会長(当時)と前年(1987年)初当選された澄田信義島根県知事(当時・4期故人)のご挨拶

会報創刊のいきさつを、携わった方にお聞きしました

創刊時(1～2号)の編集長
中野 雅行さん(高校17期／現在松江市在住)
当初の会長
今岡 昌滋さん(高校7期／乙立町出身)
お二人へのヒアリング(本年4月)をもとに寄稿。

関西久徴会 事務局長
糸賀 良悦(高校19期／神西沖町出身)

関西久徴会会報は、1988(昭和63)年に創刊されました。その2年前は、関西久徴総会の会場が「ニューミュンヘン」から「ホテルニューオータニ大阪」に移り、大盛況のうちに開催された年です。

「ホテルニューオータニ大阪」での総会の成功で関西久徴会への関心が高まっていた頃、竹下文夫さん(9期故人)と竹下俊夫さん(10期／会長任期1974年～1986年)兄弟の建築設計事務所「トランスナート」(大阪市本町)に、山村順子さん(3期)、杉谷保憲さん(4期／会長任期1986年～1988年)、今岡昌滋さん(7期／会長任期1988年～1999年)、石原千恵子さん(8期)ら10数名が集まった幹事会の席で、関西久徴会員の交流の輪をさらに広げ、親睦を深めようということで、会報創刊の提案がなされました。その頃、中野雅行さん(17期)が山陰中央新報社大阪支社におられ、会報創刊の話が一気に進みました。

当時は会費もなく、会員の方からの協賛広告集めに奔走し、ご寄付によって発行を賄っていました。原稿集め、編集作業は現在のようにインターネットもなく大変な時代でしたが、中野編集長のご尽力と、関西久徴会ネットワークの勢いで創刊された会報第1号は、タブロイド版10ページの立派なもので、1988(昭和63)年5月21日「大阪国際交流センター」での総会で出席者に配布されました。

その後、編集長は藤井暉彦さん(13期／前会長)、谷口美茶子さん(25期)と引き継がれ、関西久徴会のコミュニケーション必須アイテムとして、本号(46号)に受け継がれています。

初期の会報づくり ～封筒の「糊付け（作業）名人」もいた～

3～20号、26～32号 編集担当
藤井 暉彦（高校13期／塩冶町出身）

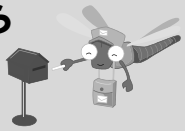
「組織に会報は必要だ。制作費はない。しかし、何とか作ってくれ！」

それが、当初、私に与えられた使命だった。手書きで郵送される原稿を、すべてワープロで打ち直す。当時、ワープロには編集機能がなかった。〈字体〉〈縦・横〉〈文字の大きさ〉それぞれごとに、少しずつ文章を作っては割付紙に貼り付けていった。また、広告を依頼し、それで印刷費を捻出した。

発送作業には、梅田のビルの会議室を使っていた。20人程が集まり、会報の三つ折りから作業は始まる。封筒の糊付け作業等もあって、ずいぶんと手間取った。退館時刻（22時）までに終了せず、ビル管理所に（三拝九拝して）延長をお願いしたことが何度もあった。「糊付け（作業）名人」と呼ばれる人までいたほどだ。

「金がない」で始まったが、原稿集め、製作、広告集め、発送作業における会員の目に見えない人件費を考えればずい分高価な「会報づくり」であった。大変だったが、今にして思えば楽しい思い出でもある。

1990（平成2）年から B5判8ページに、年2回の発行・郵送が定着



3号　1990（平成2）年発行
紙面から当時の手づくり編集の大変さがうかがえます
年2回の定期発行になり、会員同士の世代を超えたつながりも深まっていきました

翌年発行の4号からタイトルデザインが変わり、「人・集い、人・語る、ふれあい永遠に」のメッセージが目を引きます
1994（平成6）年発行の10号表紙には、お若い藤井暉彦編集長（当時・広報委員長）の笑顔も！

1999（平成11）年 紙面をひとまわり大きく（A4判）、写真も増加

21号　1999（平成11）年から紙面サイズを拡大、文字も大きく読みやすく、デザインを一新しました

ご協力とご愛読、ありがとうございます

21～25号、33～本号（46号）編集担当
谷口 美茶子（高校25期／平田町出身）

初めて編集を担当させていただいたころは、総会の合間の年に親睦会も開催されるようになり、さらに同好会も誕生するなど、記事のネタには事欠きませんでした。

その後、ホームページやメーリングリストなどを活用したネットコミュニケーションも広がり、執筆者の発掘や原稿集めなどもスムーズになりました。

いまでは、こちらからムリヤリお願いしなくても、寄稿させてくださいというれしいお申し出も増えています。

私自身は、一度ヘコタレて編集を降板しましたが、ちょうど50歳になって再び戻り、たくさんの方に応援してもらっていることに気づきました。そして、「いつもながらの会報を、いつもどおりにお届けできるのがいちばん」だと思うようになりました。

ご協力くださっているみなさん、ご愛読いただいているみなさん、ありがとうございます。

2005（平成17）年発行の33号で、現行の紙面デザインへリニューアル、イベントやネット関連の記事が増加
この年の総会で藤井暉彦会長から、現・今岡渉会長へバトンタッチされ、現在に至っています